

北 風

竹 本 洋

艶やかな句をつむぎだした桂信子さんの作品のなかに、自身の句境をのべたものがある。

“ われによき師ありて北風をいそぐなり ”

私にもよき師といえる人がいる。とはいえ私には北風に向かう決然とした意思に乏しく、師のある幸せに漫然と浸るだけである。その人から対談書が届いた。太平洋戦争も末期になって、結婚までもない新妻をのこし、この人は二等兵として南方に送られる。その途上、米軍の魚雷の標的となった輸送船は沈没し、一昼夜海面を漂った末に運良く救助され、その後の戦地での軽からぬ体験を経て妻のもとに帰り、研究者の生活に復帰する。その20年後、自分の研究成果を昭和天皇に話す機会が訪れた。その時のことをこう語られている。

「かつては軍隊の最下級を自認していた人間が、ほんの20年経っただけで最上級の人にお会いして、いたわりの気持ちを持ってお話しをしている。そのことが、その事実が、いかにあの時代が激変したかということを確認に示していると思うのです。そんな時代の境を、意識的に超えなかった人がいまの大多数ですよ。それで、世の中それほど変わらないと思って暮らしている。事實は、歴史は、そんなことではないんです。」

二等兵が大元帥にじかに話をする事など、戦前には天地が逆転するに等しいことであつたであろう。だが歴史はそのように動いたのである。いま私たちは、世の中の変化に敏感であるようでいて深いところの変化にはきわめて鈍感なのではないだろうか - とりわけ変化へのスピーディな対応を説く人ほど。そういう人は、自分以外の人を世の中の動きを素早く読み取れない「遅れている」人と非難することに忙しく、世相や市場の移ろいを歴史の動向と見誤っているのかもしれない、という疑いの眼を自分自身に向けることはない。そのため変化に即応しようとする改革に際限なく追い立てられ、ほどなく改革それ自体が自己目的と化し、改革の最終的な目的は思念の外におかれる。

(経済学部教授・学部長)